

5 次は、寺田寅彦（一八七八年～一九三五年）が書いた文章です。これを読んで、あとの問いに答えなさい。（1から4は、段落の番号を表します。）

1 ここに茶わんが一つあります。中には熱い湯がいっぱい入っております。ただそれだけでは何の面白みもなく不思議もないようですが、よく気をつけて見て見ると、だんだんにいろいろの微細なことが目につき、さまざまの疑問が起こってくるはずですが。ただ一杯のこの湯でも、自然の現象を観察し研究することの好きな人には、なかなか面白い見物みぶつです。

（中略）

2 湯気が上がるときにはいろいろの渦うずができます。これがまたよく見ているとなかなか面白いものです。線香の煙でも何でも、煙の出るところからいくらかの高さまではまっすぐに上りますが、それ以上は煙がゆらゆらして、いくつもの渦になり、それがだんだんに拡がり入り乱れて、しまいに見えなくなってしまう。茶わんの湯気などの場合だと、もう茶わんのすぐ上から大きな渦ができて、それがかなり早く回りながら上っていきます。

3 これとよく似た渦で、もっと大きなのが庭の上（注1）なぞにできることがあります。春先などのぼかぼか暖かい日には、前日雨でもふつて土のしめついているところへ日光が当たって、そこから白い湯気が立つことがよくあります。そういうときによく気をつけて見ていてごらん下さい。湯気は、縁の下や垣根の隙間すきまから冷たい風が吹き込むたびに、横になびいてはまた立ち上ります。そして時々大きな渦ができ、それがちょうど竜巻のようなものになって、地面（注2）から何尺もある、高い柱の形になり、非常な速さで回転するのを見ることがあるでしょう。

4 茶わんの上や、庭先で起こる渦のようなもので、もっと大仕掛けなものがあります。それは雷雨のときに空中に起こっている大きな渦です。陸地の上のどこかの一地方が日光のために特別に温められると、そこだけは地面から蒸発する水蒸気が特に多くなります。そういう地方（注3）の傍に、割合に冷たい空気におおわれた地方がありますと、前に言った地方の、暖かい空気が上がっていくあとへ、入り代わりにまわりの冷たい空気が下から吹き込んできて、大きな渦ができます。そして電（注3）がふつたり雷が鳴つたりします。

（寺田寅彦「茶わんの湯」による。）

(注1) なぞⅡ「など」に同じ。

(注2) 何尺Ⅱ一尺は、約三〇・三センチメートル。

(注3) 電Ⅱ主に積乱雲から雷雨に伴って降る、直径五ミリメートル以上の氷のかたまり。

一 ――線部①「湯気が上がる時にはいろいろの渦ができます。」とありますが、「茶わんの湯気」の渦の様子が書かれた一文を本文中から探し、**最初と最後の五字ずつ**を書きなさい。(句読点も一字に数えます。)

二 ――線部②「そういう地方」とは、どのような地方ですか。次の**条件1**と**条件2**にしたがって書きなさい。

**条件1** 「日光」、「水蒸気」の二語を必ず使って書くこと。

**条件2** 「地方」で終わるように書くこと。

三 **2**段落から**4**段落までの展開の仕方について説明したものと**して最も適切なものを、次の1から4の中から一つ選びなさい。**

- 1 話題を、抽象的なものから具体的なものに移しながら、文章を展開している。
- 2 話題を、小さな現象から大きな現象へと移しながら、文章を展開している。
- 3 話題を、現象の観察から科学的な実験へと移しながら、文章を展開している。
- 4 話題を、特殊なものから一般的なものに移しながら、文章を展開している。